特別レポート　国公立大のAO・推薦入試活用

入試を見据えた徹底的な「ネタ入れ」が、目的意識の高い生徒を育む

――静岡県立吉原高等学校の実践

AO・推薦入試の中心は小論文や課題論文、志望理由書である。いずれも手間のかかる指導のため高校現場では戸惑うところも多いだろう。だが、近年は私立大のみならず国公立大でもAO・推薦入試を行うところが増えてきていて、受験生にとっては大きなチャンスになる。今号では近年、AO・推薦入試を積極的に活用して国公立大に合格者を増やしてきた、静岡県立吉原高校の事例をレポートした。

国公立大59人合格の衝撃

中堅レベル以下の普通科高校にとって、生徒の進路開拓は切実な課題である。4年後の進路を想定すれば、できれば国公立大への進学をと多くの先生方は考える。その一つのチャンスになるのが、AO入試・推薦入試である。

これらAO・推薦入試で進学実績が急激に伸びたのが、静岡県立吉原高等学校である。資料①・②で吉原高校の進路状況を見ると、平成21年以降、国公立大学に60人近くの合格者を出し続けている。

吉原高校は今年で創立102年を迎える伝統校である。平成9年に女子高から共学校となり、現在は普通科5学級と国際科1学級の6学級構成。2年次以降文理分けを行い、文系と理系に難関大学を目指す特進クラスが1つずつ、残り3クラスが普通クラスとなる。

平成21年度から進路課長を務める松本誠司先生（地歴科）は、「僕が赴任した平成18年ごろは、授業が成り立ちにくいクラスの方が多かった」と当時を振り返る。

平成20年度、松本先生は国際科3年生を担当。このクラスは「学年で最も成績が悪いクラス」だった。だがこの生徒たちが吉原高校に「転機」をもたらした。

彼らの多くは大学進学を希望していた。だが、一般入試で有名大学に入れる学力はない。そこで松本先生が目をつけたのが「AO入試・推薦入試」である。例えばオーストラリアに一年留学した生徒にTOEICを受験させてみると、675点の高いスコアを獲得した。この実績を生かして、彼女を中央大学経済学部、日本女子大学文学部の推薦入試に挑戦させたところ、見事に合格したのである。

さらに課題論文が課される立命館大学AO入試にも4人が合格。また、「AOでの国公立大」を希望していた生徒3人には応募できる大学を片っ端から調べ、それぞれ島根県立大学、横浜市立大学、群馬県立女子大学に合格させた。他にも推薦で宇都宮大学や都留文科大学、福島大学や京都外国語大学などへの合格者を次々と出した。

「最下位には最下位の戦い方がある（笑）。学力があまりない子たちにトップ校と同じことをやらせてもダメなんです。それならば、裏技（AO・推薦入試）だと」と松本先生。

――あのクラスであれだけ入れたのだから、うちの学年もやればできるのでは？

これらの事例に力を得て、翌・平成21年度3学年は、様々な教育活動を生かした「AO・推薦入試」での受験を本格化させる。この年は静岡大学や都留文科大学など国公立大にAO・推薦入試で50人、一般入試を含めて過去最高の59人の合格者を出した年でもある。

例えば1年次から担任の中村勝芳先生（現・静岡県立春野高校勤務）の指導の下で、様々な活動を行っていた国際科で「外国人児童生徒への学習支援ボランティア」に参加していた女子生徒。筑波大学のAO入試に出願させ、「富士市の多文化共生や自分自身の国際交流体験」など、原稿用紙80枚余りの論文を書き上げ、一次試験を通過。二次の口頭試問は通らなかったものの、その経験を生かして東京学芸大学教育学部国際理解教育学科の推薦入試を受験させたところ、見事合格した。

この生徒は名古屋地理学会での発表の他、中央大学環境論文全国5位、拓殖大学国際協力理解賞全国4位など、「沢山のお土産付き」（松本先生）だったのである。

他にも、「立命館大学の環境論文コンクール佳作受賞者⇩立命館大学政策科学部合格」「洞爺湖サミット時のグローカル地図コンテスト最優秀賞受賞者⇩上智大学外国語学部ポルトガル語学科合格」「TOEIC800点⇩国際教養大学合格」というように、大学や国が主催する論文コンクールなどに積極的に応募し受賞することが、AO・推薦入試対策として功を奏す結果となったことが読み取れる。

「攻め」の姿勢で受験させる

これらの経験に基づいて、吉原高校のAO・推薦入試を柱とした進路指導体制が整ってきた。ここでその体制を見ていこう。

●2年次―実績づくり

資料③は大まかなAO・推薦入試をにらんだスケジュールである。

生徒の志望校を決めるのは、3年4～6月の個別面談である。だがこの時点でAO・推薦入試の準備に入るのでは間に合わない。

そこで2年次6月の「進路ガイダンス」では入試の形式を説明すると共に、夏休みに「AO・推薦への活動実績づくり」をするように働きかける。

例えば理系は、大学でのサイエンスキャンプや模擬授業への参加、文系はボランティア活動や論文コンテストへの応募、英検二級取得などだ。「何も無い人は行くところが無い」。部活を一生懸命やらせる一方で、その他の活動実績づくりに向けて、何が必要なのかを生徒に意識付けするのである。

●志望理由書で動機づけ

そして2年の冬休みは生徒全員に「志願理由書」「自己推薦書」を課す。「夏休みに色々やってきた生徒は進学の目的が見えているのですが、大半はそうではありません。自分が何も考えていないことにここで気づく。『無知の知』を意識させることが目的です」と松本先生。

さらにこの志望理由書に基づいて、2月、3月には担任との個別面談を行う。面談は全員を対象とはせず、初めに「志望が定まった生徒」を3～4人呼び出し、1人30分余りかけ丁寧に面談する。

面談を終えた生徒の多くは、志望校選びに向けて調べものを始める。そうした友人の姿を目の当たりに、呼び出しがかからない生徒は不安に陥り、「私も面接して！」と来るようになる。「40人いる中で10人が動けば、あと20人は動くようになる。生徒の進路意識へのレディネスが整わないと、いくらこちらが声をかけても意味がありませんから」と松本先生。最初の数人は、進路意識を高める「呼び水」役となるわけである。

●難関校で「練習」

志望校決定と入試方法を決めるのは、模試を受けた後の、3年6月の担任との個別面談である。

そして面談を踏まえ、志望校の調整や推薦者を決めるのが、3年の「担任会」である。毎週一回集まり、生徒の志望動向の情報交換や指導方法を話し合う。「学年全

●資料①　吉原高校の進路状況の推移

卒業年		H 24	H 23	H22	H 21	H 20	H 19	H 18
卒業生数		240	240	238	224	240	238	275
国公立大合格者数	推薦・AO	57	52	45	50	20	18	19
	一　般	3	7	9	9	7	9	6
	計	60	59	54	59	27	27	25
	実進学数	58	57	52	58	26	24	21
私立大合格者数	推薦・AO	81	98	88	108	85	86	82
	一　般	35	14	100	67	45	43	61
	実進学数	116	112	116	113	130	131	146
4年制大学実進学数		174	169	168	170	156	155	167
（4年制大進学率）		72.5%	70.4%	70.6%	75.9%	65.0%	65.1%	60.7%
短大実進学数		17	30	26	28	29	28	26
（短大進学率）		7.1%	12.5%	10.9%	12.5%	12.1%	11.8%	9.5%
専門学校実進学数		31	22	34	18	37	33	69
（専門学校進学率）		12.9%	9.2%	14.3%	8.0%	15.4%	13.9%	25.1%
就職者数		12	16	12	7	13	19	10
（就職率）		5.0%	6.7%	5.0%	3.1%	5.4%	8.0%	3.6%
その他		6	3	3	1	5	3	3

体で話をすることで、担任間の指導に差がないようにすることを意図しています」と松本先生。

担任会ではAO入試や公募制推薦や指定校推薦などの受験先も調整する。「この生徒は理系は芳しくないが、英語はよくできる」といった情報が集まることで、利用できる受験方法を模索する考えもある。

なお、生徒の志望校決定での基本方針は次のとおりである。

①理系を中心とする成績トップ層は一般入試で受験。②次の成績層は、一般入試で入れないような国公立大を志望する場合、AO・推薦入試を挑戦させる。③一般入試は無理な生徒も、AO・推薦入試など全ての機会を利用する。

通常、AO・推薦入試では成績相応の無難な志望校を選択することが多い。しかし吉原高校の場合、チャレンジ校にまず受験させる。「落ちた経験は『ものすごく悔しい』。それをバネに次の受験を目指すことを意図しています」と松本先生は語る。先述した「筑波大学不合格⇩東京学芸大学合格」の生徒はそのような事例の一つだが、他にも「社会事業大学・推薦（不合格）⇩山梨県立大学人間福祉学部・一般入試（合格）」「都留文科大学・推薦（不合格）⇩京都外国語大学・一般入試（合格）」など、幾つも事例がある。

なお、吉原高校の進学先は国公立大を中心に全国に及ぶ（資料②）。一般的には少子化や不況で地元志向が強いと思われるが、「だからこそ、地方の国公立大を勧めるんです。東京の私立大学だと家賃は女子で10万円、物価も高く仕送りは14・5万円もかかります。ところが地方の国公立大ならば学費が安い上に家賃も食費も安い。遊ぶ場所も少なく友人の下宿に集まる程度なので、大学で勉強するほかありません」と松本先生は語る。国公立大への憧れもあり、素直に受験する生徒が多いという。

ネタ入れで固まる志望動機

AO・推薦入試突破に不可欠なのが小論文と志望理由書対策だが、吉原高校が重点を置くのは、徹底的な「ネタ入れ」である。「ネタが入っていなくては何も書けません。ネタが入ってくれれば自然と書けるようになります」（松本先生）

資料④には吉原高校の小論文指導のポイントをまとめてある。その大きな特徴が、「テレビ番組を活用したネタ入れ」である。「NHKスペシャル」「クローズアップ現代」「夢の扉」「サイエンスゼロ」などのテレビ番組を視聴し、志望校の出題傾向に応じてネタを増やしていくというものである。

活用方法は徹底している。まず一回目には通しで視聴させ、二回目にポーズを取って「全文の文字起こし」をさせる。そして三回目に内容を要約させる。内容が理解できた段階で、ようやく新聞の切り抜きや新書の講読に入る。

松本先生がこの指導法を思い立ったのは、国際科時代である。「格差社会やグローバリゼーションなど、小論文の出題テーマは、教科書にはほとんどない時事問題で、リアルタイムに『ネタ』を集めていないと書けません。ところが本校の生徒に『新聞や新書を読め』と言っても言葉が難しすぎる。彼らは日常会話レベルには思考が及びますが、抽象概念は理解できず関心もないから何も書けない。そこで思いついたのがテレビ番組でした」。

この時見せたのはNHKスペシャルの「ワーキングプア」。番組視聴の後で要約を課した。

だがここで予想外の事態となる。「彼らはどうでもいい数字ばっかり拾い、具体例に共通する『だから●●だ』という結論を書けない。要約力がないというのは恐ろしいと感じましたね」（松本先生）。

そこで考案したのが、「番組の全文の文字起こし」である。ポーズを押しつつ、地道に全番組の言葉を字起こしするというものだ。この作業を通じ、生徒は「抽象的な言葉」を知り、書けるようになる。そして意味の分からない言葉は辞書を引かせる。こうした作業を経て生徒たちはやっと要約ができるようになった。

松本先生は「一番大事なのは、『分からなきゃ意味がない』ということ。テレビは映像が主体でイメージが湧くので理解しやすい。ワーキングプアも暗記するまで見れば、『格差社会』が理解できるようになります」と指摘する。

松本先生はこれまで、小論文に関連のある番組をDVDに録画し続けてきた。その数は今や900本以上になるという。

テレビ番組によるネタ入れは「志望理由書」対策にも有効である。特に理系の場合、バイオテクノロジーやロボット工学やITなど、生徒の志望先に応じて「最先端の内容で、かつ特徴的なテーマ」を集め、志望動機に絡めていく。これらの番組には大学の研究室もしばしば登場するため、「志望校選び」の絶好のネタにもなる。

こうしたネタ入れも含め、吉原高校では実技教科も含めた全先生方で添削指導を行う。「本校の生徒は一般入試では入れない。そこでワンチャンスをモノにするために、徹底的に調べます」。『学研小論文問題分析集』などを用い、「過去問の分析」を行い、類題もひろう。その上で先の「ネタ入れ」と共に、実際に入試問題を踏まえた添削指導を行うのである。

過去問を5年間余りたどり、その大学の専任教員の専門分野を隈なく調べると、出題傾向は見えてくる。今では幾つかの大学のスペシャリストがいるということだ。

プレゼン対策に「五人組」

最後に資料⑤の面接、プレゼンテーション、口頭試問対策（通称：五人組）を見てみよう。これは先の小論文指導の先生たちが中心になり、同じ大学、系統を志望する生徒4～5人でグループを作り、ゼミナール形式でプレゼンテーションを行うものである。

まず、一人の生徒（通称：生け贄）の論文をグループ全員で読ませる。その後、この生徒が論文の要旨について10分程度のプレゼンテーションをし、これに対してメンバー全員（通称：ギャラリー）が30分程度の質疑応答をするという流れである。そして質疑応答が終わると、今度は別のグループと

●資料②　過去５年間の国公立大合格者の内訳

●国立大学

大学名	平成24年度	23	22	21	20
北見工業大	1		2		
室蘭工業大		1			
秋田大	6	3	8	2	1
山形大	2	1		2	4
福島大	1				1
宇都宮大	1	1	1		1
群馬大	5	5	5		
茨城大		1		1	
埼玉大	1	1			
東京学芸大				2	
東京海洋大	1		1	2	
電気通信大				1	
山梨大	5	5	2	5	1
信州大	1				
静岡大	10	11	8	11	3
浜松医科大		1	1		
富山大	1		1	1	
福井大		1			
岐阜大				1	
名古屋工業大	1				
三重大		1		2	
鳥取大	1			1	
島根大				2	
山口大			1		
小　計	37	32	30	33	11

＊山形大の１名は過年度卒業生

●公立大学

大学名	平成24年度	23	22	21	20
釧路公立大		1			1
公立はこだて未来大				3	
岩手県立大		1		1	
宮城大	1		1		1
秋田県立大	1	1	2	1	2
国際教養大				1	
山形県立保健医療大	1				
群馬県女大	1	1	2	2	1
前橋工科大			1		
高崎経済大				2	
横浜市立大		1	1		1
都留文科大	12	11	9	12	5
山梨県立大		1	1		
静岡県立大	1	4	3	2	2
静岡文化芸術大	3	2	2	(2)	(1)
尾道大		1			
島根県立大	2	1	1	2	3
山口県立大			1		
名桜大	1	2			
小　計	23	27	24	26	16
防衛大学校	1				

＊防衛大学校１名は過年度卒業生

●資料④　小論文指導

(1)　**課題論文作成指導**
・参考となるテレビ番組等をDVDに焼き、各自に渡してまとめさせる
・論文を書く際の統計データ類は各自ネットで調べさせる

(2)　**小論文添削指導**…各教科（過去問＋『学研小論文問題分析集』等から類題を拾いやらせる）
・新聞の切り抜きをさせ、内容をまとめさせる
・参考となる新書等を紹介し、まとめさせる（関連知識を強化）

(3)　**全教科職員全体で分担**
国語（国文・教育・福祉・看護）地歴公民（歴史・地理・法・経済・国際・環境）、英語（英文・国際・教育）、数学（情報・数学・工）、理科（工・理・農・バイオ）、家庭（栄養・服飾）、体育（保育・看護＝専門学校・体育）、芸術（芸術文化・音楽・美術）

●資料③　AO・推薦入試の指導

2年	夏休み	**AO・推薦への活動実績づくり** ●理系＝ScienceCamp、模擬授業等に積極的に参加させ大学での研究に興味関心を持たせる ●文系＝NPO・ボランティア活動（外国人児童支援・保育・環境・地域再生等）に積極的に参加させる 各種論文コンテストへの応募（原稿作成とそのための活動実績づくりや個人研究・地域研究）
	冬休み	**志願理由書・自己推薦書作成（全員）→**１月末にRewrite⇒面談指導の資料としても利用
	1～2月	**個別面談**（志望校選定、AO・推薦をやる生徒は何をやりたいかを明確化）
	春休み	文系AO・推薦希望者は各自でテーマを設定し2000字程度の論文を作成提出させる。
3年	4～6月	**文系・AO・推薦希望者は個別面談で志望校選定（6月末までに）→**進路検討会（期末試験中） ⇒夏休み前に指導担当者決定（各教科で担当者決定⇒夏休みに指導開始）
	夏休み	**●AO・推薦希望者**…志望理由書、自己推薦書作成（AOで作成したものを推薦でも流用できるように） 英語系（都留文AO・静岡文芸英語推薦等）…要約・英作文の個別指導 **●課題論文作成**（センターテストを課す推薦も、課題図書がある場合は夏休み中に読ませておく） **●理系AO一次試験**…各自で勉強させながら指導。大学でやりたい具体的な研究テーマを設定 **●実験（化学系）**…無機＝中和滴定・有機＝サリチル酸メチルをつくる実験・実験器具手順
	9～10月	**AO指導** ●面接・プレゼン・口頭試問指導（4～5人のチームでゼミ方式で） ●推薦から始める生徒もAO面接指導に同席させる＋小論文（過去問＋ネタ入れ）
	10～11月	**推薦指導** ●小論文添削指導（10月後半から本格的に添削・小論文問題分析集等で類題もひろい書かせる） ●面接・口頭試問指導

メンバーを入れ替え、同様の発表と質疑応答を行っていく。

グループ例としては、「格差社会チーム」「グローバリゼーションチーム」、「自然エネルギーチーム」「地域再生チーム」「経営チーム」「レアメタルチーム」など。また「都留の会（都留文科大学国文希望者）」「秋田大学工学部チーム」など、志望大学別のグループもある。

五人組のねらいは「面接者の視点」を把握させ、答案に活かすこと。また、友人の話を通じて互いの「ネタ」を共有させることも目的だ。「友だちを合格させたいと思ったら、できるだけいじわるな質問をしろ。論文に書いてないことをうまく突くように」と先生方はギャラリー役の生徒に言う。初歩的な質問が多く、専門的質問は教員が行うが、時々、教員も思いつかない質問も飛び出す。

生け贄役の生徒がこれらの質問に答えるには、背景まで含めて理解していないと説明できない。「質問にうまく答えられず、泣き出す生徒もいます」と松本先生。分からないことはその日のうちに調べ、翌日には答えさせる。悔しくて泣いた人はたいてい合格するという。

指導は昼休みや放課後など先生の空き時間に行われるが、指導が夜11時まで及ぶ熱心な例もある。なお、先生の不在時や他のグループを見ている時には、自分たちで面接練習をさせ互いにチェックし合うなど効率的な対応もなされる。

ユニークなのは、「受験は団体戦」との位置づけから、五人組に対して「全員が受かるまで」勉強を継続させることである。「受かったらお前たちが面接官だからな、最後の一人が受かるまでは帰れないと言うんです」と松本先生。

AO・推薦入試での合格者が多いと一般入試組の士気は落ちやすい。だが吉原高校の場合「五人組」に加えて、全員にセンター試験を受験させるなどして士気の低下を防ぐ工夫を行っている。9月にAO入試で合格したのに、仲間が3月22日に国立大学の後期試験に合格するまで毎日、一緒に進路室で勉強し続けた生徒もいるほどだ。

＊

「最初は、ものすごく心配していたのです。彼らは学力が低いから進学後、大丈夫だろうかと」と取材の最後で松本先生はこう漏らした。しかし予想に反し、多くの卒業生たちの大学での活躍ぶりは華々しい。

例えば学年最下位層から、ある国公立大学に進学した生徒は、大学で首席となり、今や大学の代表として中国や中南米へ研修に派遣されている。また今年、就活の報告に来た卒業生は「うちらは、高校でさんざん志願理由書や自己推薦書から、ゼミ形式討論や論文作成までやらされたから、大学や就活では何も困らなかった」と語っていたという。

こうした卒業生たちの姿に松本先生は、「最初はただ、何とか生徒を大学に合格させようと必死にやっていただけですが、生徒たちは目的意識を持って大学に進学していきました。

普通科高校でのキャリアガイダンスの必要性が叫ばれていますが、うちは志願理由を考えさせる中で何を学ぶために大学に行くのか、そのために今何を学ばねばならないかを考えさせ、学問と世の中の接点も意識させているので、結果的に僕たちのやってきたことは、王道だったのではないかと思うのです」と感慨深そうに振り返る。

今後の抱負は「高大接続」を進め、生徒たちに早い時期から学問への世界に触れさせること。また地域のNPOやボランティア団体と連携し「社会的な視点」を培うこと。併せて一般入試を想定した受験対策や、総合的な学習の時間を活用した小論文指導（すでに1年で実施）を進めることである。

加えて重要なのが「ノウハウの継承」である。「『専門家』が転勤したらそれで終わりになってしまうのでは困ります」と松本先生。

それぞれの先生の「秘伝」をいかにオープンにし、教員間で共有化していくか。「指導の記録とデータベース化」に向け、吉原高校の進路指導体制は、新たなフェーズに入っている。

（取材・文／福永文子）

資料⑤　面接・プレゼンテーション・口頭試問指導

(1)同じ大学または同系統の受験者4～5人ごとにグループを作りまとめて指導…ゼミ方式
(2)一人が受験生役、他の生徒は教員と共に試験官役を務めさせ、質問＆ダメ出し
(3)専門的質問は指導担当者が中心となって行う
(4)自主練習＝一般的質問（志願理由・教科・高校生活）については朝・放課後にグループの生徒同士でも練習させる